

不易と流行の視点で見直す地域の版画教材（１）

—東牟婁美協版画教育の歴史と現在—

西尾 正寛

畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

Consideration of regional leaning material from immutable and trend. (1)

- History and present of printmaking education at Association of Art Education in Higashimuro. -

Masahiro NISHIO

Department of Education, Faculty of Education, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

要約 本稿は、和歌山県東牟婁地方美育協会の版画教育の特徴と課題を捉え、その伝統的な取り組みに乗っ取り、図画工作科が育成を目指す資質・能力を実現する版画教材の開発を試みた成果と課題を報告する。研修研究組織による教育力が高い同協会である。一方、同協会が版画教育を学んだ「日本教育版画協会」の創立に深く関係した「生活綴方教育」の教育観が身近な生活から主題を生み出す指導に影響し、組織として伝統的に受け継がれてきた過程で主題の選択が教師により固定化されてきたことが課題として伺えた。そこで、児童が表現の主題を生みだせるよう発想や構想の過程を見直した教材を開発し実践を試みた結果、児童が身近な生活から感じたり想像したりしたイメージを基に話し合う活動を通して主題を生み出すことが重要であるとの成果を得た。

Keywords：日本教育版画協会、版画教育、共同制作、作文教育

はじめに

戦後、民間教育運動団体によって実践の開発と普及がなされてきた版画教育は、日本の図画工作・美術教育の発展に寄与してきた歴史をもち、伝統的に版画教育に取り組む地域は各地にある。版画教育には、文化や歴史を支えてきた人々とのつながりを学ぶ不易の側面がある。そこでは身近な環境や生活と結びついたテーマを基に、表現の主題を生み出すという戦後の版画教育が目指した教育観を認めることができる。

一方で、平成20年改訂以降、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等の資質・能力をバランスよく育成してきた学校教育において、より多様なテーマから表現の主題を生み出す学習が求められ、子どもの「写る」現象や「写す」行為への関心や意欲に応じ「版に表す」造形活動の解釈を広げ、「写す」行為や写った形や色から表したいことを見付けて表すなどの多様な実践が開発されている言わば流行の側面もある。

和歌山県東牟婁地方では「和歌山県東牟婁地方美育協会」通称「東牟婁美協」を中心とした図画工作、美

術教育が盛んで、中でも版画教育は東牟婁美協自らが認める伝統的で特徴的な取り組みである。作品には、自分たちの遊び、地域の祭り、地域に伝承される物語、地域の農業、水産業、林業など第一次産業に関わる人々が働く様子などが再現的に表され、東牟婁美協の版画教育が、児童が身近な生活や社会から表現の主題を生み出すよう指導してきたことが伺える。

学習指導要領では、「A表現」の絵に表す活動を、感じたことや想像したことなどのイメージから、表したいことを見付けて、好きな形や色を選んだり、表現方法を考えたりしながら表すことと示し、児童はおよその目的やテーマを基に発想や構想を行い、自分なりの技能を活用しながら表し方を工夫して思いの実現を図っていくことになるとしている。表現の主題は児童が自ら見付けることができるよう、教師が幅広く教材を設定することが求められている。しかし、東牟婁美協の版画教育においては身近な生活から主題を生み出す指導への強い傾斜が伺えるのである。

和歌山県では2022年10月に造形表現図画工作美術教育研究全国大会和歌山大会^①を開催した。分科会で研

究発表を担当する東牟婁美協では伝統的に取り組んできた木版画による「共同版画」⁽²⁾を発表内容に選択した。2019年8月に東牟婁美協の夏季研究会「那智山研究集会」の講師、2020年1月に「共同版画」の研究授業の助言者を務めた経緯から大会に向けた研究協力の依頼があり、会員とともに「共同版画」の実践開発に取り組むことになった。

本稿は東牟婁美協の版画教育を引き継いできた伝統的な教育観の不易の視点とこれからの社会を生きる児童に図画工作科が育成を目指す資質・能力の流行の視点から見直し、「共同版画」の教材の開発に取り組んだ成果と課題を報告する。

1 東牟婁地方の図画工作科教育と本研究を導く問題意識

(1) 東牟婁美協の組織による教育力

東牟婁美協は図画工作・美術教育研究を志す小学校教員と中学校及び高等学校の美術科教員により、1947年に、東牟婁地方美術教育連盟として発足、その後1961年には現在の名称になっている。

本研究で東牟婁美協を研究の対象とした理由の一つが盛んな教育研究及び研修活動にある。活動で特徴的なのは、会員が互いの実践発表や、外部講師による講演や研修を通して新しい知見を得る夏期的那智山研究集会、年間3回の作品審査会と展覧会など、会員が集まり互いに研鑽し合える場を組織している。時には文部科学省より教科調査官を招聘し、最新の教育情報を取り入れる機会も設定している。

3回の審査会と展覧会は、地域の環境や産業を主題にする「海と船の絵画展」、内容に制約を設けず日常の指導の成果をもちよる「郡学校美術展」、版画の作品のみを対象とする「郡学校版画展」からなる。審査会は東牟婁美協の会員を中心とする作品出品校の教員の相互審査により行われる。そこでは若手や中堅、ベテランが分け隔てなく審査に参加し、協議を通して東牟婁美協としての教育観を共有し、実施すべき題材やその指導の在り方について学び合う。審査を経た作品は、地域内の施設で展示され、児童や保護者、地域住民の目に触れる。審査に関わらなかった教員も作品を見て東牟婁地域の教育観を共有する。域内の組織で教育力を向上させる機能をもつ、この地域の特徴的な取り組みである。

(2) 東牟婁美協の版画教育の特徴と本研究を導く問題意識

前述の東牟婁美協が行う三回の展覧会の内、郡学校版画展の出品校、出品数が最も多いことから、東牟婁地方の学校では版画教育の充実が見て取れる。これが、

東牟婁美協の版画教育を研究対象にしたもう一つの理由である。

学習指導要領では児童や学校の実態に応じて、児童が工夫して楽しめる程度の版に表す経験や焼成する経験ができるようにすることと示している⁽³⁾。指導計画の作成と内容の取り扱いで示されるこの事項は、版画や焼成の学習が複数の用具や器具を用い、準備や片づけの負担が大きいことや他の活動と比較して安全に留意する必要があることを理由に敬遠されがちである実態を踏まえていると考えられる。学習指導要領が示す版画教育の危機認識に対し、充実した状況というべき東牟婁美協では、小学校学習指導要領や教科書に先行する版画教育の教育課程、版画教育で身近な生活や社会から主題を生みだす指導の二つの特徴を見ることがある。

小学校学習指導要領では、版に表すことを、同じものを何枚も写し取る、反転して写る、版ならではの表現効果がある造形活動とし、例として、身近な材料を利用したスタンピングや身近な場所やものの凹凸を写すフロッタージュなどを示している⁽⁴⁾。図画工作科の教科書では1学年及び2学年ではスタンピングやフロッタージュ、ステンシルが主で、紙版画は2学年で選択的に扱われ、主に扱われるのは3学年である。また、木版画は主に4学年で使用される3・4年下巻に初めて掲載される。

東牟婁美協が1985年に制作した画集『版画』には1・2学年では紙版画の作品が掲載される。3学年以上の作品は殆ど全て木版画で、現在も同様の取り組みが行われている。東牟婁美協の版画教育では「版に表す」活動に留まらず、全学年で「版画に表す」活動を指導し、教科書の学習内容と比べても木版画は一学年早く取り組まれる。三学期になると、東牟婁地方の多くの学校・学年でこの特徴的な版画の教育課程に基づく版画の学習が行われる。東牟婁美協の組織的な教育力により各学校の教員が版画の指導力を身に付けていることが、版画教育の充実の背景にあるといえよう。

もう一つの特徴は、画集『版画』から引用した図1から6の作品が示すように、東牟婁美協の版画教育は「生活画」⁽⁵⁾と称される作品で占められていることである。

和歌山県南東部に位置する太平洋に面した各自治体には漁港があり、那智勝浦町では延縄漁法によるマグロ漁を中心とする漁業が盛んで、太地町では古式捕鯨を起源とする捕鯨産業の歴史がある。一方、地域の大半は山間部で、熊野川流域でのユズ、北山村でのジャバラなどの柑橘類の生産が行われている。また、熊野川流域は、かつて杉や檜を主とする林業で栄え、新宮

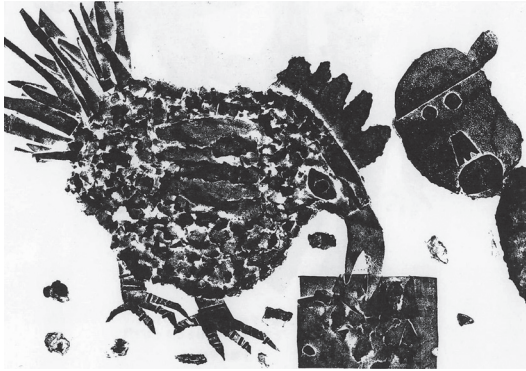


図1



図2



図3



図4



図5

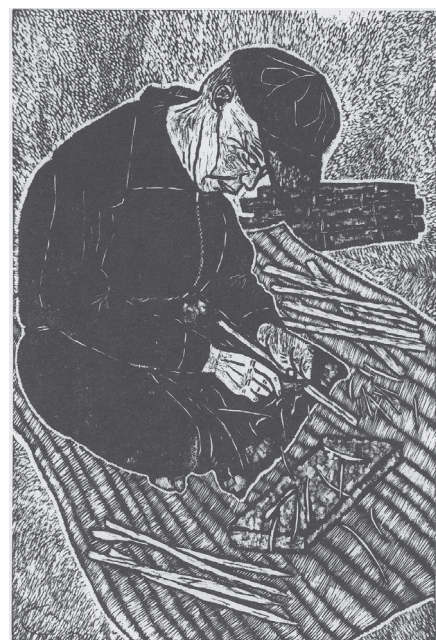


図6



図7

市は木材の積出港であったことから製材業が盛んであった。こうした地域の生活や社会が伝統的に東牟婁地方の版画教育の主題を生みだしてきた。

更に、この地域の版画教育の実践には「共同版画」がある。90cm×180cm程度の版木に10人前後で取り組む「共同制作」である。図画工作や美術の活動で一般的に知られる、決められた部分を個別に受け持つ活動ではなく、児童全員で一作品の画面全体に関わる活動である。

学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の一つ、絵に表す活動で育成する思考力、判断力、表現力等を「感じたことや想像したことなどから、自分の表したいことを見付けて表すこと」と示している⁶⁾。児童が表したいことは、日常の遊びや生活など現実的なことばかりではない。教科書では、身近な生活に主題を求めるものだけではなく、物語や詩から想像を働かせる、材料の形や色、触った感じから表したいことを見付けるなど多様な学習活動が掲載されている。東牟婁美協の郡学校美術展では、親しみのある文学作品や教科書掲載題材などを扱い、児童が想像したことから表したいことを見付けて表した作品も出品されている。

東牟婁美協は充実した研究、研修組織をもっているが、版画教育については「生活画」の系譜が強く表れ、児童が「自分の表したいことを見付けて表す」学習指導要領の指導事項との乖離が見られ、伝統的な取り組み故の課題となっていることが考えられる。

東牟婁美協の会員とともに版画の「共同制作」の題材開発とその検討に取り組むに当たり、版画教育が東牟婁美協にどのようにして根付き展開してきたのかを

理解することにより現在の課題と改善策を検討すること、そして、児童が自ら主題を生みだすことができる版画教育の教材開発の示唆を得ることが本研究の問題意識となった。

2 東牟婁美協の版画教育の導入と啓発

(1) 創立記念誌に記録されている東牟婁美協の版画教育導入と啓発の経緯⁷⁾

東牟婁美協創立70年記念誌『美協70年』記載の年史から東牟婁美協の主要事項及び版画教育に関する事項を抽出する。

- ・1947年 東牟婁美育連盟発足
- ・1949年 児童生徒作品展
- ・1952年 日本美術教育学会 学術研究大会（京都大学）に委員長以下複数の会員が参加。以後、交流は1974年まで続いた記録がある。
- ・1956～1957年頃から郡学校版画展を開催。初回の開催年、通算の開催回数の正確な記録が残っていない。
- ・1979年 全国版画教育研究大会開催。熊野川町立九重小学校 単独の版画集『民話 百夜月』出版
- ・1981年 熊野川町立九重小学校 単独の版画集『民話 楊枝菓師』出版
- ・1985年 地域で実施された版画題材の作品による画集『版画』を出版

これらの記録から、東牟婁美協の版画教育の普及の

経緯を行事や成果物から推測できるが、版画教育の普及に至る導入や啓発の経緯、身近な生活から主題を生み出した教育観は読み取れない。これについては、現会長の芝崎勝善氏、2009年～2015年に東牟婁美協会長の清水雅昭氏（以後 清水雅氏）も認識がないとのこと。そこで、版画教育導入と啓発、普及の経緯について把握するため、東牟婁美協のOBに聞き取り調査を試みる場の設定を清水雅氏に依頼し実施した。

（2）版画教育に関わった教員からの聞き取り調査により得られた東牟婁美協の版画教育導入と啓発の経緯

聞き取り調査の対象を引き受けて下さった、松下稔氏は小学校教員として、平田勝男氏は中学校教員として共に1970年代に版画教育に関わり、その後、東牟婁美協の役員に就かれたことから、東牟婁美協の版画教育の導入と啓発について、現在、最も確かな情報を提供頂ける方として清水雅氏が人選、依頼をされた。

聞き取り調査の概要は以下の通り。

- ・実施日時 2022年8月1日（月）午後14時から15時30分頃
- ・実施場所 那智勝浦町立宇久井小学校
- ・出席者 松下稔（元 那智勝浦町立色川小学校、同勝浦小学校など）
平田勝男（元 新宮市立熊野川中学校、同緑丘中学校など）
清水雅昭（元 新宮市立光洋中学校、那智勝浦町立宇久井中学校など）
芝崎勝善（元 新宮市立熊野川小学校、現 那智勝浦町立宇久井小学校）
清水悠里（現 那智勝浦町立勝浦小学校）
福田誠（現 北山村立北山小学校）

敬称略

筆者

出席者については、この研究に関わることを了承の上で出席頂いている。聞き取り調査の対象の二人に加え、芝崎勝善氏は東牟婁美協現代表、清水悠里氏、福田誠氏は教材開発の協力者として出席をお願いした。

西尾が聞き取り調査の目的、大学の紀要掲載を目指すことを伝え、清水雅氏が進行。松下氏、平田氏はそれぞれにご高齢のため話しやすい内容と調子で話して頂き、清水雅氏、芝崎氏も会話に加わる形で進んだ。

冒頭で松下氏、平田氏に伝えた聞き取り調査の目的は次の二点。

- I 東牟婁地方に版画教育がどのような経緯で導入され、取り組まれるようになったのか。
- II 生活に密着した主題がなぜ継続的に扱われてきたのか。

聞き取りは90分近くに及び、内容は拡散的に展開した。聞き取った内容は調査の目的に沿って次の6つに整理した。

- ① 東牟婁美協における版画教育の導入について
- ② 版画教育の意義
- ③ 版画教育に臨む指導観
- ④ 生活に密着した主題の由来
- ⑤ 「共同版画」に取り組む意義と指導
- ⑥ 審査会及び版画展の意義

以下に、関連する聞き取り内容の抜粋とその考察を記述する⁸。なお、聞き取り内容についての発言者氏名は敬称略で示している。

① 東牟婁美協における版画教育導入について

松下：なんで版画が東牟婁に定着したかというのと、僕一番大きいのが民間教育研究団体であった日本教育版画協会というのがあった。ここへ皆が参加したということかな。東牟婁から、美連（東牟婁美協発足当時の名称「東牟婁美育連盟」の略称）からみんな（で参加した）ア。大田耕士と言う先生が代表でね。もうすごく熱心だった。そこ行ったらね、まず、教師への実技指導から入るんですよ。（自分がする）子どもの指導よりか、分からないんです。実技指導。紙版画は紙版画の、エッチング⁹はエッチングの、木版は木版の、それぞれ版画の部門でね、好きな（技法の）ところに行ってね、実技（の研修を）する。それがまあ、魅力でね。で、やっぱり版画をするには教師の指導力、教師のやっぱり彫らんと刷らんと、という、そういうところから出発。芝崎：その頃は東牟婁ではそんなにまだ版画してない頃ですか。松下：していなかった。

松下氏（下線部ア）によれば日本教育版画協会の啓発活動に東牟婁美協の前身の組織から相当数の会員が参加し、そこで学んだ成果を前述の東牟婁美協の研究会や研修会を通して会員に啓発し、版画展を通して版画に関わる教育観の共有を図ったことが版画教育の始まりとのことである。

『美育40年史』（1988）では、1960年頃に若手教員が版画教育を学ぶために日本教育版画協会に参加したことが記録されており、熊野川町立九重小学校の版画集『民話 百夜月』、『民話 楊枝薬師』に日本教育版画協会の創始者で協会委員長の大田耕士が序文を寄稿している。これらの事実より、東牟婁美協は日本教育版画協会と一定期間に継続的に関わりをもち、東牟婁美協の指導で生まれた作品を、日本教育版画協会の研究活動や展覧会に持ち込み、そこで得た評価や指導技術

等が東牟婁美協の版画教育の発展に寄与したと考えられる。

一方『美育50年史』（1998）では、若手教員が版画の指導について東牟婁美協の組織内で学んだと記録がある。東牟婁美協の現役の指導者である清水雅氏、芝崎氏らには日本教育版画協会との直接的なつながりの記憶がないことから、1990年代途中で関わりが途絶え、現在に至っていると考えられる。

② 版画教育の意義

東牟婁美協における版画教育の意義は二点語られた。一つは児童の学びに関わるもの、もう一つは、版画の複数性を生かした版画教育の情報公開に関わるものである。

聞き取り調査にあたって松下氏が提供された、『東牟婁地方図工美術教育研究会要項』には、児童の学びにかかわる版画教育の意味が端的に示されている⁽¹⁰⁾。

年に一度の版画に子ども達の心が躍る。刃物を持って遊び歩くことがない現在、唯一の刃物であった鉛筆けずりも電動になった。彫刻刀で彫る喜びは大きく、版画の嫌いな子どもはいないと言っても過言ではないだろう。

いよいよ彫りの時間。切れ味のよい刃を使って刃勢を大切に彫り進める。目つきがちがう。小鳥の声も友達のささやきも、教師の忠告も耳に入らず、刃の音の快さだけがあるのみである。

さあいよいよ刷りだ。インキの香と版木の香が交じって決定的瞬間を迎えるのである。

松下氏が残している文章には、彫刻刀を始めとする版画用具を使うことへの期待、版木を彫る際の抵抗感、音、木やインキの香り、作品が完成する刷り上がりの瞬間など、児童を表現行為に誘う諸要素が示されている。それらには、作品とは直接関係ない版画教育の学びに関わる意義があるとしている。

松下：刷りは1枚でなく、最低3枚刷ってくださいと。1枚は学校へ、1枚は先生に、1枚は本人へと、家へもって、必ず家へ（帰るように）ね。冷蔵庫へ貼ったりとか、好きなところへ貼ってね、1年間見てもらえ、というぐらいね、やっぱり作品を大事に。1枚じゃ足りないですね。最低3枚は刷らせました。…中略…子どもの見る目を養うのに（も役立てました。この作品は）東牟婁の先輩達やね、私がつくったのね、ちょっと見てごらんと。下絵がよく似ているので参考になるかと、見せました。それが、ま、これ（前述の『東牟婁地方図工美術教育研究大会要項』）ですね。これ、そんなこと書いてます。日本版画協会へ行って、やったということ、そういう

（そこで学んだ）やり方がねえ、東牟婁がどんどん、どんどん小学校から紙版画から出発して、低学年だったら低学年の先生とか、版画の好きな先生がいて、刺激されて、中学校は中学校で取り入れて、取り組んでくれて、そういう形で、版画展へ出すことの楽しさと、それから全国へ持って行って見てもらう楽しさと、とにかく子どもの作品を表に出すというかな。普通子どもの作品というのは、学校で作品つくって、教室へ貼って、みんなに見てもらうって、参観日に見てもらって、で、家に持ってって終わり、っていう形多いと思うんですけど、版画は何枚も刷れますし、いろんなところへ持って行って、子どもの作品を評価できる。ここ大事にしたということであつたかなと思います イ。

松下氏は、版画の複数性が生かされる点を強調している（下線部イ）。作品を家庭にもち帰り、子ども自身の学びの記録としたり保護者が子どもの学習の成果を知ったりすること、学校に残し教師の指導資料や児童の参考資料として活用すること、他校や他地域の研究組織との交流に活用できることなどである。複数の児童による「共同制作」は学校の玄関や体育館など児童や保護者、他校の教員が見ることができる場所に一定期間掲示することで教育活動に関する情報とその効果を共有する働きを果たしてきたという。版画の複数性が様々な目的で活用されていることが伺える。

③ 版画教育に臨む指導観

松下：墨入れがやっぱり、全国大会でも墨入れをものすごい重視したね ウ。重視。子どもであろうが何であろうが、墨入れで決まる、というぐらい。技術的にね。僕らはやっぱり、どっちかという墨入れ。墨入れのことも、要項に書いてます。早く彫りたい気持ちを抑えている子どもたちの姿をいじらしく感じる。墨入れこそ版画の生命であるなど。（しかし）子どもには無関係という（一同おだやかな笑い）。子どもは早く彫りたくてたまらない。そこをね、お互いに話しながら、（子どもが）なにか満足するよう指導していく。ここが、一番大事なかなと思います。さていよいよ彫りの時間。いつも僕はね、新しい彫刻刀を買わせました。包丁と一緒にです。切れ味が悪いとね、怪我します。もう僕は彫刻刀だけはね、贅沢しました。目つきが違います。この小鳥の声も友達のささやきも教師の忠告も耳に入らず、刀を持ったら心に…聞き取れず…。で、墨入れがしっかりしていたら教師は無駄なことは絶対言いません。黙ってね、怪我せんかなっていうぐらい。黙って見ている。

松下：その試し刷りをしてというのは好きじゃない。試し刷りは中学校の後半、2年生ぐらい、ならいけるんだけど、小学生はね、教師の指導が入りすぎてしまうんですね。「もっと彫れ」とか「どう、これでいいと思う」とかね「線彫りばかりやね」とかね。だから試し刷りせんと、一発勝負すると、いうぐらいね エ。部分的に刷りたいなってときはね、もう墨でもクレパスでも使ってできますよ。版画紙でバレンでこすったら写りますんで。ま、そんなことしたこともあります。それからですね。インキ、要りますね。刷りの紙も要りますね。台紙も要りますし、バレンも要ります。全部これ活動予算にね、もう4月の当初に予算、図工で必ずこれらを頼んで買ってもらいました。できるだけ学校です。

下線部ウで示される墨入れは、表したいことを鉛筆やフエルトペンなどの線で描いた版下絵の彫らない部分に墨を塗り、白と黒の構成をみる方法である⁽¹¹⁾。この過程を確実に行うことで子どもは版画の完成した状態を想像することができるようになる。早く彫りたい児童の意欲を抑えてこの段階を徹底する指導の重要性を語りつつ、子どもには無関係であるとも述べている。一方、彫りの段階では、安全面での配慮以外ではできるだけ子どもに関わらず見守っていたと述べている。松下氏は版画では一般的な試し刷りを、児童に不要な指導を押し付けるきっかけになるとして否定した上（下線部エ）で、彫りの効果を確かめたい児童に必要最低限で応じる方法も用意している。児童にとって、刷り上がりまで作品の完成を想像しにくい版画の負の特徴を墨入れの指導の徹底により補い、彫りの段階は児童の関心や意欲に任せ、試し刷りについては個に応じる指導を用意するといった一連の指導である。ここには児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかという観点で進める現行の学習指導要領が示す「深い学び」をつくりだすための授業改善⁽¹²⁾に通じる考え方が伺える。

用具では、木版画の学習を始める前に新しい彫刻刀を準備するという。新しく彫り味のよい彫刻刀は安全に使えることはもちろん、前述の子どもの「彫る」行為への意欲を満足させる。彫刻刀以外のインク、刷り紙、版画作業台やバレン、ローラーなどの版画用具は学校で用意している。これは学習環境の整備である。松下氏の口述には現代のどの教科等にも通用する教育観を見取ることができる。

墨入れを重視する考え方は、松下氏、あるいは、東牟婁美協が独自に培ってきたと考えられる。大田耕士

は自身の書籍で、墨入れは高学年の指導内容とし、低学年や中学年では「うす墨で塗っておいてもよい」との記述に留めている⁽¹³⁾。墨入れの段階は確かな作品づくりを支えるが、対象の児童の年齢によっては彫りに関わる児童の意欲を損ねるためであろう。東牟婁美協は日本教育版画協会に学びながら、研究大会や審査会に実践記録や作品を提出し、評価を受ける過程で「よい作品」にする指導の工夫を重ね、それが作品主義的な性格を帯びるようになったとも考えられる。

④ 身近な生活から主題を生みだす指導の由来

清水（雅）：松下先生、東牟婁では生活密着型がやっぱり強かったですね。

松下：そらもう、一番やね。

平田：人数も少ないしね。そのアイデアがたくさん出たとしても、5、6人のアイデアなんやね。100人、200人のアイデアではない。（絵の主題が）生活に密着してるのは、児童の生活体験がみんな一緒やから オ。

清水（雅）：僕が着任した頃は審査会行ったら、牛の絵とか、稲刈りの絵とか、ほぼ魚の網引っ張っているとか、エビ引っ張ってるとか。生活の中で、身近な生活の中で描かすことが圧倒的に多かったんちがうかな カ。大阪では都市部なので、回りにビルばかり、ずらあっと並んでいて、それがまた一つの生活圏になっているから。だから大阪は想像画の美術なんよ。以前に大阪から那智山研究会へ先生一人来てもらって話を聞きました。東牟婁のやっていることとは、よいわるいは全く関係なしやけど、違うことやらすんやと思いました。

平田：僕はたまたま新宮という町から熊野川という、奥へ行ったんや。奥に行ったら、もう本当に何もない。町も灰色やし、松下（正行）先生という方がおられてね。切り絵したら、ツートンカラー二色なんやから。空と地面の二色で終わり。これはあかんぞと言って、じゃあどうしたらええのかいうたら、なんせ、色を探さなあかんと言って、色の付いたのいうたら何や、種類が少しだけあって、本当に無いんや、ほんまに。今はちょっとあるようやけど、昔は無かったんや、ほんまに。そしたら一度、美術の時間に一回、みんなで散歩行こうや言うて、石が上に積んである所あるやろ、あれを、沢の流れに行って、で、あぜ道通って、牛小屋通って、牛小屋無い所もあって、洪水防ぐアガリヤ⁽¹⁴⁾というのもあって、（芝崎：洪水の…）洪水の。ずうっと見て来て、どこが一番印象に残ったんや言うたら、みんなそれなりに、口々に言って面白かったんや キ。じゃ、一つだけでいいから、自分の好きなところ探して描こうかと言うて。

戦後の民間美術教育運動における絵画教育では、感情を開放し創造的な表現を重視するか、現実的な事象に対する正確な知覚や認識を重視するかが争点となった時期がある¹⁵。東牟婁美協の版画教育は後者である。松下氏（下線部オ）、清水雅氏（下線部カ）、平田氏（下線部キ）らの発言から、表現の対象に地域の生活や社会が選択されていたことが分かる。この教育観が東牟婁美協の身近な生活から主題を生みだす指導の由来になったと考えられる。清水雅氏の、大阪の都市部と生活実態の比較から、東牟婁の現実認識の重要性を確認していることは、東牟婁美協の指導の正当性を認めさせる一方で、地域の生活や社会に対する認識の固定化の懸念も感じさせる。東牟婁地方では、近年、観光資源の活用や都市部から離れた住宅地としての開発、それらに関係する商業施設の新設などが行われ、地域の特徴が変容している状況もある。

⑤「共同版画」に取り組む意義と指導

松下：「個人制作」より「共同制作」がよいという理由は、いっぱいあるんですけども、その中の一番はね、子どもはすぐやるんですね。仲間と一緒にね、同じ（一つの）版（を）つくる、というね。これがね、仲間づくりにつながるからク。学級が騒々しかったのにこのシーズンになると、すごくこう落ち着いてくるのね。苦勞しながら下絵をつくって、で、墨入れ作業に入ると。…中略…「共同制作」の一番ええのが、学校に残るといこと。「共同制作」して、で職員会議で「またつくっているから、この作品はここへ掲げたいんです」と話して、学校の中へ架けさせてもらおうといことを職員会で決めてもらって。そして、職員全員で架けてもらいました。私がいた色川でもそうでしたし、太地でもそうです。で、学校へ架けると、目が肥えた視点が、学校と地域と他へも移っていくんです。

清水雅：やっぱりあの「個人制作」との違いは、やっぱり「共同制作」になると、結局、コミュニケーションがいるやん。どうするか、ていうケ。素材でも。ま、井戸端会議やね。その井戸端会議が子どもを育てるとこはあるやないですか。子どもが喧々諤々話し合い、先生が上手に助言者になって、「こうしよやないか」「これいこやないか」といきつくまでの、いわゆる、形成的評価の部分になるけど、そこの部分があって、それが色や形になって、刷りになって出来上がってくる。

松下氏（下線部ク）、清水雅氏（下線部ケ）が「共同制作」の主な意義と指摘する仲間づくりとコミュニケーションは、教科の内容の精選や総合化が始まる昭和

50年代頃までは、音楽や図画工作、体育の一部など直接的な表現を内容とする教科が独自に育成できると主張していた能力であるが、全ての教科等で思考力、判断力、表現力等や豊かな人間性を育成するようになる平成元年以降は、学校教育全体で育成する能力となっている。

また「共同制作」の意義は仲間づくりやコミュニケーションだけではない。小学校学習指導要領は「各学年の内容の「A表現」の指導については、適宜共同してつくりだす活動を取り上げるようにすること」と示し、配慮事項として「児童一人一人の発想や構想、技能などが友人との交流によって一層働くようにすることが大切である。特に、決められた部分を受けもつだけで活動が終わらないように留意し、児童一人一人が共に活動をつくりだしている実感がもてるように工夫することが重要である」¹⁶としている。

ここで、2020年に那智勝浦市立色川小学校で清水悠里（以下 清水悠）教諭が指導した実践を通して「共同制作」の考察を試みる。

近年、授業時数の削減や教員の若年化により実践されなくなっている「共同制作」を学びたいとの清水悠教諭の意図で行われた実践における複数の児童が表したいことやその構成を考え、版下絵をつくる場面である。

共同して表すので、表したいことを学級の児童5年生5名・6年生3名、計8名による対話を通して検討する。授業の導入時に清水悠教諭が「色川地域の木版画を学ぼう」とテーマを示し、子どもは東牟婁美協作成の版画集の鑑賞を通して地域の版画の伝統や「共同制作」の存在、「共同制作」が、色川地域の環境や生活を主題にしてきたことなどを知り、自分たちも「共同制作」に取り組みたいとの思いをもつ。そこで一人一人の児童が思う色川地域を象徴するものやことを言葉や絵に表して提案し、「共同版画」に表したいことを検討する。さらに一人一人の児童が表したいことを絵に表してもち寄り、版木に置き、全体の構成を話し合う。

「個人制作」の活動で環境や生活を主題にすると、人を中心に画面の構図がおおよそ決まるが「共同制作」では、もち寄った複数のイメージを大きな画面でどのように構成するかを話し合うことで、新たに画面全体のイメージが生まれ、その構成を発想や構想する。「共同制作」は「個人制作」より、児童が思考力、判断力、表現力等を働かせる過程の幅が広いのである。

松下：「共同制作」はね、画面も大きいですし、描きたいこと、いっぱい子どもらもありますし、で話し合いながら描くんですけどね。描き過ぎてしまうんですね。描き過ぎていたらね、刷っ

てみたらね、焦点がぼけていてね。「もっと白い部分、残せないか」というような、助言よくしました コ。…中略…色川茶でも葉っぱ一枚一枚描いていたらね、とてもじゃない。…中略…テクニックじゃないんですけども、子どもに「労作するんやから」と（描き過ぎないように）カットする。それも共同制作の一つやで、ということも（必要な）時には指導したらええんやないかな、と。こう思いますね。

「共同制作」では、複数の子どもの表したいことの集積になるので、過密な構成になる傾向がある。その点については教師が指導すべきという主張（下線部コ）である。画面の構成の美しさやバランスは思考力、判断力、表現力等を働かせながら身に付ける造形的な特徴であり、理解できるようにすることは教師の役割である。また「共同版画」で身に付けた構成の美しさやバランスは版画以外の表現や鑑賞の学習で生かされることが期待できる。

⑥ 審査会及び版画展の意義

松下：浜口勇一先生（戦後の和歌山県美育連盟初代副会長、東牟婁美育連盟初代委員長）とか、長尾綾男先生、田本先生とかね。この先生方は僕の助言者でした。あの、この人は、やっぱりね、井嶋先生⁽¹⁷⁾ね、血が受け継がれているように思うんですね。で、この先生らの共通点はね「子どもが喜ぶ美術教育せなあかん」と言ってね、常に「子どもの目が開くようなね、輝くようなね、題材選びをしないといけない」とかね。「子どもがすることと、教師がすべきことをはっきりせなあかん」と言ってね。

松下：（審査会で）作品を見てもね「この作品はええけども、教師の指導入り過ぎや」とかね、ものすごい、こう、そういう感性を養われたね サ。

芝崎：その頃はその版画の審査会っていうのはありましたか。

平田：（昭和）32年（が初めて）か。その前までは無かったんや。私らの時はあんまり版画の…聞き取り不可能…前後の文脈から「版画の作品を東牟婁全体で審査をする場」といった意味か…は無かって、でもこれは、新宮の市立図書館で展示会やるんや。ちょっと上のいくつか下の人がするんやけど、東牟婁全体の版画展というのをやって、コンクールやなんか、でそれから緑（新宮市立緑丘中学校）の美術室にね、版画の作品をずらっと並べて、私らの時分は、立って、（作品を）貼って審査しとった。貼ってみんなで司会をし合って「この絵はどうか」「この絵はどうや」て。浜口先生が緑におられたから、

その流れで版画の（指導の）技量を高めるために、みんなの目で見て…。

芝崎：小学校も中学校も…それで緑で。

平田：この辺りから版画が栄えてきた。中学校では全部木版画ではなくて。そういう学校もあったんやけど、1年生は木版画で小学校からの流れになっているわな。2年生になったら色版画ちゅうて、これ、あの、板に色を付けるのやって、3年になったら、ドライポイントとか、そういう一般的な流れがあった。

清水：出品校が多い。郡（学校美術）展や海の日（海と船の絵画展）よりはるかに多い。僕も審査員手伝いに行くんやけど、（松下、平田）先生の世代から始まって、ずっと、引き継がれて、そして僕らの世代になって、僕も退職してもずっと付き合ってきて、もうほとんど若い先生が中心になってきているのに、版画の時期になったら学校の雰囲気として、みんな版画に一生懸命に取り組み始める。郡展の時やったら「まあ出さんでも別にいいかな」という雰囲気の学校もあるし、海の絵やったら、山の学校は遠慮することもあるけど、明らかに版画になるとみんな「せなあかん」という背景があるみたい。市教委の熱の入れようがあるから出品校が多いとも思うけど、各部会で部会長、町村部会みたいなものがある⁽¹⁸⁾。その中心になる先生がおられて、8部会内で講習会、あったでしょ。町内の研究会で、身内で集まって、先輩が後輩に技術を教える シ。

平田：稲葉健先生という元気な人がいて、あの先生とか、ようけ何人もいて「やいやい、この作品どうや」って、「やっ、やあ、あんた」って意見や主張があって、いろいろ討議してる ス。だから、彫りにしても何にしても、技術的にも上がったってことは間違いない。「この作品、みんな見いや」って言って、それぞれの意見よく出しながら、それを毎年やっとして。だから、新宮はレベルが高いから教えて欲しいんやって（三重県から）言って来て。…聞き取り不可能…東牟婁の美育協会が一般向けにつくった勉強に来て、うちも版画教育の研修会つくりたいて言うて…。

大正期の山本鼎の「自由画教育運動」⁽¹⁹⁾を始めとして、日本の民間美術教育運動は、コンクールと展覧会を教育観の啓発の手段としてきた。日本教育版画協会も同様⁽²⁰⁾である。東牟婁美協がその手法に倣ったことに無理は感じられない。

出品する学校教員による合議制で行われる審査では

教員の意見が一致しないことも当然起こる(下線部サ、ス)。それが作品の見方や指導方法に関する対話を生み、相互に学ぶ機会として活用されてきたと語られる。

版画は、「表したいことや表し方を考え、版下絵をつくる」「考えた版下絵が表せるように工夫して彫る」(紙版画の場合は「考えた版下絵が表せるように紙を切って貼り合わせたりつないだりする」)「意図した彫り(版)の効果が表れるように刷る」など、いくつかの工程を経て作品が完成し、それら工程ごとに必要な技法や指導技術がある。日本教育版画協会に学んだ成果が地域内に普及するに従い、教員に指導できる教員が増え、東牟婁内の各市町村レベルでの研修が可能になった(下線部シ)と思われる。

「写す」「写る」ことへの子どもの関心に基づき、粘り強く版をつくり、刷り上げる瞬間を楽しむ造形活動は、1年間に一度という機会の少なさも影響し、子どもの版画への意欲を高め、それを支え保証しようとする教員の指導への意欲と力量形成にもつながったと考えられる。学校の教室、審査会、研修会がそれぞれの機能を働かせ、東牟婁美協の版画教育の普及と発展を支えたのである。

3 日本の版画教育の歴史と東牟婁美協の版画教育の関係

(1) 小学校学習指導要領 図画工作科における版画の扱い⁽²¹⁾

昭和33年改訂の小学校学習指導要領で、表現の内容に「絵をかく」「ものを作る」などと並んで「版画を作る」が示される。昭和43年改訂では内容「絵画」の学習内容の一つとして示されるようになり、平成元年改訂まで同様の扱いが続いている。平成元年改訂以降「新しい学力観」に立つ教育を目指し「内容の教育」から「資質や能力の教育」への転換が図られる中で、絵の表現の一形式である版画は各学年の学習内容で示されなくなり、「第4章指導計画の作成と内容の取り扱い」の「2 内容の取り扱いと指導上の配慮事項」において、各学年で扱うように示されるようになる。現行の学習指導要領で『各学年の「A表現」の(1)のイ及び(2)のイについては、児童や学校の実態に応じて、児童が工夫して楽しめる程度の版に表す経験や焼成する経験ができるようにすること』⁽²²⁾と示される内容は、版ならではの複数性や表現効果、生活の中にある印刷技術や美術の伝統や文化と関連する学習としても取り扱うことの重要性に基づいていると考えられる。

(2) 民間教育運動による版画教育の普及の経緯⁽²³⁾

① 「創作版画運動」から普通教育へ

浮世絵、錦絵などに代表される木版画は日本の伝統的な表現手法である。芸術作品として扱われる浮世絵であるが、出版当時の「役者絵」や「名所絵」は経済的に余裕をもつ庶民の関心を満たす商品として、「絵づくり」、「彫り」、「刷り」などの行程を専門とする職人による分業制で大量生産されていた。明治期に入り熟達した表現技術により報道メディアとしての役割ももつようになるが、金属版、石版、写真など外国からの印刷技術の導入と普及により、やがて、商品としての役割を終えていく。

明治後期、若手美術家の間で、浮世絵、錦絵を支えた伝統的な制作様式を否定し、作者自ら絵づくり、彫り、刷り全てを担う「創作版画」の考え方と実践が「創作版画運動」として起こり、やがて「日本創作版画協会」の創立へと発展する。作者の表現過程の一貫性を強調し、個性と主体性を尊重した。近代的な意識の下に主題が取り上げられ、彫刻刀の用法や種類、版材も自由に選ばれ、版画の表現技法は特定の技術者のものではなく一般化され、創作する喜びが共有されることになる。創作版画運動には、多くの美術家や詩人が参加していた。その中には後に「自由画教育運動」を起こす山本鼎や子どもの自由詩の運動を起こす北原白秋もいた。

この創作版画の考え方が大正期の「自由教育運動」⁽²⁴⁾の潮流に伴って美術教育に一般化されたものが自由画教育運動である。

創作版画運動と自由画教育運動がともに発展していく過程で創作版画は自然に子どものものとして、普通教育に取り入れられていく。しかし、当時の図画教育と手工教育に分けられていた普通教育の美術教育で、版画は位置付けが曖昧であった。教育的内容の追及が不十分なままに、日本政府の戦争への傾斜と戦時教育の導入の影響も受け、発展を妨げられることになる。

② 日本教育版画協会の創立

終戦後、教育の目的や目標を見失った虚脱から再生を図る取り組みは戦前の創作版画運動や自由画教育運動の担い手達により始められる。

1951年12月、大田耕士の提唱と、複数の版画作家の参集により日本教育版画協会が創立される。この時より普通教育における版画は「版画教育」「教育版画」と称し、「教育」に立脚して新しい方向性を目指すようになる。

③ 「作文教育運動」⁽²⁵⁾と結び付いた展開

日本教育版画協会の創立前後、新しい民主主義的な民間教育運動、特に「作文教育運動」が活発になり、簡易な印刷物としての文集を作成する活動につながっていく。子どもの版画は文集の表紙やカットとして普

通教育に位置付き、やがて版画作品が中心になる版画集へと展開していく。山形県山元中学校の文集「機関車」の版画特集号「炭焼き物語」（1951.3）が、「作文と教育」「暮らしの手帖」などの雑誌に取り上げられ、教育界にも、社会的にも大きな反響と影響をもたらした。当時の作文教育に取り組む教師は新しい社会科に取り組むものも多く、版画教育は作文教育、社会科教育と結びつくことによって、広い視野をもつことになった。

1952年に岐阜県中津川市東小学校で第1回の全国作文協議会が開かれた。戦後最初の研究大会で、全国より千数百名の参加者があった。この時『夜明けの子ら』と『版畫の教室』（大田耕士）が発行され、生活版画展と中国現代版画展、版画教育座談会が開かれ、これによって全国に版画教育が高揚することになる。

また、1954年以降では版画の文学性や演劇性を生かし、和歌山⁽²⁶⁾や岩手、石川などで郷土に密着した民話、伝説の採集と版画化が盛んになっていく。

④ 日本教育版画協会による版材と技法の開発と普及活動

1953年、日本教育版画協会が開発した紙版画の方法が機関紙『はんが』7月号上で初めて発表されると、たちまち全国に広がった。最も身近にある材料で、幼児にも表現が可能、紙の質感による独特で豊かな表現ができる新しい版形式として全国に広く受け入れられた。紙版画の開発によって、幼児・低学年からの版画教育が可能になり、版画を指導する対象と版表現の内容を拡張することになった。

日本教育版画協会は、より細密な表現ができる銅版による凹版⁽²⁷⁾の開発にも取り組んでいる。創立時は腐食銅版画（エッチング）の普及活動をしているが、その後、銅板に変わる版材に当時の硬質ビニール板、セルロイド板、現在の塩化ビニール板を用いたドライポイントを開発、普及させた。やがて、表面をコーティングしたボール紙による板紙凹版技法⁽²⁸⁾を開発し、一層普及する。

1953年には、第1回全国小・中学校版画コンクールが行われている。ここでは、紙版画による小学校1年生の「共同制作」、5年生による木版画の「共同制作」が出品され、版画の「共同制作」という、今までにない表現方法が開拓された。第2回からは「共同制作」の部門が設けられ、これが他の部門よりも盛んになった。

1954年には日本教育版画協会主催で第1回全国版画教育研究大会が開かれ、3日の日程で講演、実技指導、研究発表が行われた。研究発表では、特殊教育（現在の特別支援教育）、都市の教育、地方農村の教育が取

り上げられ、当時の代表的な教育課題が検討されている。第2回以降の研究大会では研究授業（公開授業）が行われるようになり、実技研究、理論研究、授業研究が研究大会の三本柱になっていく。

1954年には、第1回全国コンクールの入選作品と技法書を兼ねた『版画のくに』、版画教育の指導の問題点を明らかにした『『版画をつくる子どもたち』（ともに大田耕士）を出版、1955年には映画『たのしい版画』が完成。その年度の優秀映画として推薦を受け、翌年の第1回国際文化映画コンクールでも最優秀作として推奨された。この後に1959年に技法映画『かみでつくる版画』『木版画のつくり方』、1960年に記録映画「たのしい共同制作」を作成。一連の日本教育版画協会による実践を通した普及活動は版画教育の向上に大きく貢献する。

③ 版画教育の普及を通してできた日本教育版画協会と東牟婁美協の関係

本稿の東牟婁美協の版画教育への二点の疑問は以下のように明らかになった。

- 東牟婁美協は日本教育版画協会創立期の研究大会に参加し、教育観や版画の技法と指導技術を学び、現在の全地域的な版画教育の取り組みに発展させてきた。
- 日本教育版画協会の版画教育とともに、作文教育の教育観である「子どもの生活において生きて働く学力を培う方途を、生活をリアルに綴らせること」とすることが導入され、現在の生活から主題を生み出す指導につながっている。

日本教育版画協会の設立、第1回の全国研究大会開催の時期と、東牟婁美協の最初の版画展開催の時期とその後の活動の経緯を照らし合わせると、松下氏が言うように、東牟婁美協の会員は日本教育版画協会の全国研究大会第1回または1955年の2回大会（愛知県岡崎市）に参加し、版画の技法と指導技術を学ぶとともに版画の「共同制作」に出会っただろうと考えられる。2005年に廃校となった熊野川町立九重小学校が1979年、1981年に出版した版画集で取り上げられた民話『百夜月』、『楊枝薬師』は、同小学校が位置した熊野川町九重に伝わる民話を主題にしたものである。ここに日本教育版画協会が取り組んだ郷土に密着した民話、伝説の採集と版画化の影響を認めることができる。日本教育版画協会の第1回の全国的な研究大会で研究発表をしている和歌山県白浜町の体育教師、佐々木賢太郎は、1952年に紀南作文教育研究会に参加しつつ、版画教育にも取り組んでいる。紀南作文教育研究会はこの時期に生活綴方教育を志し、「文学教育や版画教育の方法」を取り入れようとしている⁽²⁹⁾。白浜町は東牟

婁と隣接する西牟婁地方に属する自治体であり、和歌山県紀南とは和歌山県西牟婁地方から東牟婁地方の広い範囲を指す地域名である。日本教育版画協会が創立される同時期に紀南地方の教育を生活綴方に求め、その方法として版画教育も取り入れようとしている。東牟婁地方、あるいは、図画工作科の関係に限らない紀南地方の生活の現実と向き会おうとする教育観が西牟婁地方及び東牟婁地方の教員に日本教育版画協会の活動への参加を促したのではないだろうか。作文教育の運動と密接に結びつきながら教育運動を展開した日本教育版画協会に学んだ東牟婁美協が身近な生活から主題を生みだす版画教育を探究することに無理はなかったと考えられる。

版画教育の導入時の東牟婁地域は林業や漁業などの第一次産業で栄えた時期であり、戦後の作文教育が重視した教育観と東牟婁地方の子どもを取り巻く社会や生活の現実が一致し、生活から主題を生みだす版画教育導入はむしろ必然であったと考えられる。

東牟婁美協は、戦後の早い時期に地域の図画工作・美術教育組織を復興し、日本美術教育学会への参画を通して井嶋勉に教育的な薫陶を受け、日本教育版画協会からは版画教育を導入し、地域の特徴的な実践として育んできた。これまでの調査により、東牟婁美協が、地域教育力向上のために、物理的な距離を厭わず、必要な教育的資源の導入と独自の開発に積極的に取り組んできたことが明らかになった。

こうして東牟婁美協が育んできた版画教育の将来はどうあるべきか、会員とともに取り組んできた教材開発の成果と課題に進みたい。

⁽¹⁾ 1949年に図画工作・美術教育研究団体連絡機構・西日本教育美術連盟として設立した団体主催の全国的な研究大会。毎年度、各府県単位で開催している。

⁽²⁾ 大田耕士、関野準一郎：造形教育体系＝版画2木版画。開隆堂出版、80、1975

10～15人の子どもが作品全体に関わりながら共同制作を行う版画を指す。大田は「教育の中にはいろいろな指導のねらいがある。その中でも現在の社会で特に重視していかなければいけないことは、人間関係を密にし、相互に集団づくりの価値を理解させ認めさせて、豊かな人間性を身につけさせることである。これらの素地は子どもの時代につくり上げなければいけない。その指導の場として造形学習の中で共同制作活動が重要となってくる」としている。「共同版画」の呼称は東牟婁美協で伝えられているもので、本稿では1項以後は大田の「共同制作」を使用する。

⁽³⁾ 文部科学省：小学校学習指導要領解説図画工作科編、日本文教出版、p120、2018

⁽⁴⁾ 同上、p120、2018

⁽⁵⁾ 金子一夫：美術教育の方法論と歴史〔新訂増補〕、中央公論美術出版、p194、2003

大正期の前衛美術グループによって形づくられたプロレタリア美術運動が、その立場から美術教育に影響し、昭和初期に北海道旭川師範学校の熊田満佐吾によって行われた実践に発するものと考えられている。芸術至上主義的図画教育を否定し、科学的精神に基づく認識と創造を目指して、絵画の主題を探究させるもの。戦時教育によって終息する。

同、p216

戦後は「新しい絵の会」がマルクス主義芸術論、社会主義的リアリズム芸術論を基礎に、「子どもたちの社会的現実との切り結びを深め、新しい生活画を育てていくこと」を目標にした民間美術教育運動の定義によって絵画教育の一つの分野になっていく。

⁽⁶⁾ 文部科学省：小学校学習指導要領解説図画工作科編、日本文教出版、p29、2018

⁽⁷⁾ 東牟婁地方美育協会：記念誌 美育70年（2017）より抜粋。

⁽⁸⁾ 内容には接続詞や助詞、接語が多いことに加え、言葉が足りなく意味が不鮮明になる部分がある。録音の記録を確認し、意味が変わらない程度に削除や加筆をし、内容を整理して引用する。

⁽⁹⁾ 菅野陽：銅版画の技法、美術出版社、p88、1962参照

⁽¹⁰⁾ 東牟婁美育協会：東牟婁地方図工美術教育研究会要項、pp17-18、1972

⁽¹¹⁾ 大田耕士、関野準一郎：造形教育体系＝版画2木版画、開隆堂出版、p80、1975

⁽¹²⁾ 文部科学省：小学校学習指導要領解説総則編、東洋館出版、p77、2018

⁽¹³⁾ 大田耕士、関野準一郎：造形教育体系＝版画2木版画、開隆堂出版、p66、1975

⁽¹⁴⁾ 落合知帆：熊野川沿い集落における水防建築「アガリヤ」の分布と分類、公益社団法人日本都市計画学会都市計画報告集、No.17、p22、2018

熊野川河口付近、現在の新宮市の河原に川原家と呼ばれる水害時に解体して持ち運べる折りたたみ式家屋が多くあり、それらが運ばれた一段高い町方にある避難用の住宅が上り家と呼ばれていた。

⁽¹⁵⁾ 福田隆真、福本勤一、茂木一司：美術科教育の基礎知識、建帛社、p33、1985

⁽¹⁶⁾ 文部科学省：小学校学習指導要領解説図画工作科編、日本文教出版、p108、2018

⁽¹⁷⁾ 井嶋勉、1951年設立の日本美術教育学会初代会長、

京都大学文学部教授

日本美術教育学会ウェブサイトより引用。https://www.aesj.org/nc2/htdocs/

2023年3月28日確認

東牟婁美協の会員が1952年から日本美術教育学会に継続的に参加していたこと、1961年には東牟婁美協の研究大会に迎え講演が行われたこと、その後、1968年東牟婁美協創立20周年記念大会でも招聘したことが年史に記録されている。聞き取り調査の中で、1980年中頃まで東牟婁美協が「日本美術（教育）学会紀南支部」を称していたことが話題となった。東牟婁美協は創立の早い時期から学会組織と関係をもちながら図画工作・美術教育研究に積極的に取り組んでいたことが伺える。

⁽¹⁸⁾ 東牟婁地域を構成する、新宮市、那智勝浦、太地、串本、古座川、北山の小中学校教員、地域全体の高校、東牟婁美協のOBと教員からなる小組織がある。地域ごとの組織単位でも研修活動が行われていたことが語られている。

⁽¹⁹⁾ 福田隆真，福本勤一，茂木一司：美術科教育の基礎知識，建帛社，p23，1985参照。

大正期、第一次世界大戦後に起こる自由主義教育を母体にする芸術主義運動の代表。提唱した山本鼎は、従来の実用主義、技能陶冶主義的な図画教育を否定し、「図画教育は美術教育である」との観点から創造主義、個性主義、児童中心主義的な図画教育の在り方を提示した。短期に全国に普及するが、実際の学習活動は写生画中心主義に偏向し、批判を受けることになる。

⁽²⁰⁾ 社団法人日本美術教育連合：日本美術教育総監戦後編，日本文教出版，p312，1966

日本教育版画協会は、1953年に第1回全国小・中学校版画コンクールを開催している。

⁽²¹⁾ 国立教育政策研究所，教育研究データベース，学習指導要領一覧を参照。

https://erid.nier.go.jp/guideline.html 2023年3月28日確認

⁽²²⁾ 文部科学省：小学校学習指導要領解説図画工作科編，日本文教出版，p120，2018

⁽²³⁾ 社団法人日本美術教育連合：日本美術教育総監戦後編，日本文教出版，pp310-313，1966
「民間教育運動からの版画教育の普及」は、日本教育版画協会委員長大田が記述している項から必要事項を引用し、まとめ直している。

⁽²⁴⁾ 吉本均編：現代授業研究大辞典，明治図書，pp28-29，1987参考

明治期から国家の主導によってきた教育の画一性や

知識の注入主義、形式主義的弊害を指摘し、それを克服しようとする動きが次第に強まってきた。それは国際的な「新教育運動」の一環でもあった。この動きが具体的な教育の改革に結びついたのが大正期自由教育である。子どもの個性、自主性、主体性、創造性などを徹底して重視する児童中心主義に立脚し、その観点から従来の画一的、権力的な教育の改造を目指すという特質をもっていた。

⁽²⁵⁾ 同，p73参考

大田が記している「作文運動」は一般的には「生活綴方教育」およびその運動と考えられる。その端緒は明治期に求められる。

生活綴方とは、個々の子どもが各自の生活に取材して自分たちの生活語で文章を綴ることであり、またそうして綴られた文章のことである。…略…明治以降の政府の教育政策と民衆の教育欲求との矛盾を克服しようとする教師たちの教育運動として成立した。すなわち、生活綴方教育の担い手であった教師たちは、教科書に書かれている教育内容と子どもの生活現実との落差に気づき、子どもの生活において生きて働く学力を培う方途を、生活をリアルに綴らせることに求めたのである。

同，p104参考

戦後最初の『学習指導要領』（試案）に基づく教科書は、児童中心的教育観に立ち、明るい未来をえがいていた。社会科の教科書には、広々とした耕地を新しいトラクターが耕している風景が掲載されていて、明るい未来が目前のようであった。だがそれは、アメリカの小市民的な生活像をうつしだしたものであり、日本の子どもたちを取り巻く現実生活とはあまりにちがいがすぎた。…中略…戦後、生活綴方教育は、コア・カリキュラムや問題解決学習の代表される新教育への批判を基にして復興し、『やまびこ学校』（無着成恭，1951）、『学校革命』（小西健二郎，1955年）、『村を育てる学力』（東井義雄，1957）などの実践記録が相次いで発表された。

生活綴方教育の本質は現実認識教育であり、国語教育を方法論とした教育改革とも言える。その文脈では、身の回りの対象や事象の形や色を捉え、イメージをもちながら知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等を育成する現在の図画工作科・美術科教育と版画教育はその本質を異にしていると言える。

⁽²⁶⁾ 1954年開催の日本教育版画協会の全国的な研究大会で、和歌山県白浜町の中学校教師である佐々木賢太郎が「版画教育の新しい展開－父兄とともに」のテーマで研究発表をしていることが『日本美術

教育総監 戦後編』p313に示されており、佐々木はこの時期以前から版画教育に関わっていたと考えられ、ここで示される和歌山は東牟婁地方とは限らないであろう。本稿作成時点で東牟婁地方の教員が日本教育版画協会とどう関わりをもったかの確かな資料に出合っていないが、これは本稿作成の目的には大きな問題ではない。

- ⁽²⁷⁾ 大田耕士，関野準一郎：造形教育体系＝版画3金属・石版画，開隆堂出版，p14，1975参考

金属板を版材とし、刀や硬針で彫り刻むドライポイントや酸による腐食によって凹部をつくるエッチングなどがある。凹部にインクをつめて印刷し、凸版画に比べて繊細な表現ができる。ドライポイントは彫った部分にできる「まくれ」が柔らかな質感を伴い、独特のタッチになる。

- ⁽²⁸⁾ 大田耕士，関野準一郎：造形教育体系＝版画1紙版画，開隆堂出版，pp52-54，1975参考

表面を樹脂加工したボール紙を版材として使う。ニードルで線を彫ったり、切り出し刀、カッターナイフで面をはぎ取ったりした凹部にインクをつめて刷るので、凹部に色がつく。

- ⁽²⁹⁾ 石田智巳：佐々木賢太郎の「命を守る体育」について，体育学研究51巻3号，2006参考

紀南作文教育研究会がこの地方の生活の現実とその上に立ってやるべき教育の方法として生活綴方と版画を志向していたこと、そこで活動していた佐々木が白浜中学校で版画が入った文集を作成していることが記載されている。